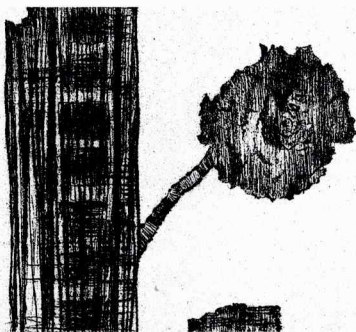


朝日 歌壇 俳壇



〈ランタンキュラスとマンション〉 岩尾恵都子

◆長谷川 耀選

雪女郎となりて逢ひたき人のあり (福岡県川崎町) 萩尾 節子
ジャカルタの歌口さむ牡蠣割り女 (廿日市市) 和泉 忠伸
水餅や母に習ひしこと多し (鹿角市) 北村 孝子
☆立春を笑ふが如き吹雪かな (長崎市) 下道 信雄
大雪の下に埋もれて友の墓 (横浜市) 白川 修
大渦の二つに割れし裸押 (玉野市) 勝村 博
寒戻る湖国丸ごと銀世界 (野洲市) 深田 清志
江ノ電の座席にひとつ桜員 (相模原市) 井上 裕実
ネクタイの日々思ひつつ若布干す (三浦市) 秦 孝浩
冬かもめ自由自由と叫びをり (藤沢市) 西 智

【評】一席。時を経ても思いはなかなか消えぬもの。八十歳とある。二席。日本ではいろいろな国の人が働いている。大航海時代のように。三席。母への感謝の一句。水餅を作りながら。十句目。投句ハガキに渦を巻く緑の蛇。湘南の人。

◆大 申 章選

思ひ出を広げるやうに舞飾る (厚木市) 北村 純一
☆立春を笑ふが如き吹雪かな (長崎市) 下道 信雄
晩学に近道はなし春の泥 (茅ヶ崎市) 清水 吞舟
凍滝の意志有る如く無き如く (長野市) 縣 展子
枯葉舞ふ飛べぬ松かさ駆け舞ふ (紀の川市) 満田 三椒
雪達磨目に赤りんご青りんご (新座市) 丸山 巖子
入試へと向かう息子の背の高さ (東京都世田谷区) 佐々木和枝
余生と言ふ鈍行列車春を待つ (和歌山市) 佐武 次郎
立春も籠もりある日の続きけり (広島市) 谷脇 篤
湯豆腐や酔わねば言えぬ事のあり (四国中央市) 石川 明憲

【評】第1句。お雛様を飾っていると様々な事を思い出す。思い出が広がるようだ。第2句。「笑ふが如き」が面白い。「立春」は人間の決めごと、「吹雪」には何の関係もない。第3句。正にその通り。春泥の径を歩くようにじっくり進んでゆく。

◆高山れおな選

からだちゆうひかりのめぐるひなたぼこ (東京都杉並区) 齋藤 満月
春立つやどていどていど改行 (川越市) 岡部 申之
囁りと問答をする嫗かな (市川市) をがはまなぶ
お雛ひの寝巻姿や山眠る (長崎市) 下道 信雄
寒林の枝の先なり屋の月 (守谷市) 高梨 隆
風邪の夜の細切れの闇ハツカの香 (江別市) 長橋 敦
雪雲の下より光る富士の裾 (藤沢市) 朝広三猫子
シリウスや歌舞伎役いへば團十郎 (さいたま市) 與語幸之助
昭和には昭和の歩幅草むし (糸魚川市) 早津 邦彦
とりどりの黄色が春を連れてくる (所沢市) 河瀬 俊彦

【評】齋藤さん。光を言った意外性。岡部さん。オノマトペは「風の又三郎」から。立春、春一番、春分と、季節も改行また改行。をがはさん。問答……。微笑ましいような怖いような。下道さん。風雪〈蒲団着て寝たる姿や東山〉を踏まえる。

◆小林 貴子選

寒さにも躓く齡となりけり (川崎市) 沼田 廣美
羽根が折れたようだ春は近いのに (倉敷市) 綾野 静子
セーターにあごをうずめてコンビニへ (富谷市) 柳尾 ミオ
恵方巻恵方も向かず切りて喰ふ (藤沢市) 朝広三猫子
亀鳴いて亀語のわかる赤子かな (志木市) 谷村 康志
風光るキッコキッコと風見鶏 (相市) 藤嶋 務
寒橋の響く小さな川の町 (国立市) 倉持 聡美
主婦としてエイエイオッ布団出る (川西市) 糸賀 千代
今更と言ひて気掛かりバレンタイン (加東市) 藤原 明
笹鳴きや吉兆吉兆と囁しおり (東村山市) 内海 亨

【評】一句目、若き日は見えるものも見えないものもすべて軽く跳び越えたが、今は自重。二句目は五七五の定型ではないが、表現に確かな詩がある。三句目、防寒の上着を着ずに出て、寒さを痛感。四句目、作法通りにはしないよという人物。

うたをよむ 「本当」を見分ける

竹内 亮

短歌を始めた頃に穂村弘の短歌講座を受講した。講座で穂村は「短歌を続けていくと、歌を詠んだときにそれが本当のことかどうかかわかるようになる」と話した。短歌は短いテキストだが、本当のことを見分ける特型でもある。

教会の鐘にはあらず速報を告げるチャイムに息を止めたり

森澤真理「地吹雪と輪転機」
森澤は新潟日報の新聞記者だ。この歌「チャイム」は共同通信が全国の報道

新しき荷風の筆のものがたり馬券の如く禁ぜられにき 与謝野晶子
晶子の社会歌に記者であり歌人である松村が日を当てている。そして本当のこととは社会的なニュースにとどまらない。ヨイグルトに蜜を溶かしてかきまぜる招かれざる火を招かぬように 東直子
東は昨年乳がんを患った。この歌の「招かれざる火」が、がんのことかどうかははっきりしない。しかし、ここには本当のことがあると感じる。

第36回日本伝統俳句協会賞 協会賞は同協会監事で「群青」同人の荻井諒一さん(42)＝千葉県＝の「花下残影」(30句)に決まった。新人賞は該当なしだった。

林誠司句集「海光」 俳句愛好誌「海光」創刊代表の第3句集。「海吹えよ白さるすべり咲く限り」「江の島へ向かつて水を打つてをり」(俳句アトラス・2500円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などに掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所・氏名・電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

風 信